

高校時代、私は同級生に彼女がいるということが理解できなかった。

私が通っていたのは中高一貫の男子校で、彼女のいる同級生はそこまで多くはなかったが存在しており、彼らがどのように彼女たちと出会ったのか、不思議でならなかった。今から考えれば、文化祭や部活の交流戦や、友人の紹介などで出会ったのかもしれない。

しかし妹以外の若い女性と話すことすらままならない私にとって、異性と楽しくおしゃべりをして、親しくなり、デートを重ね、告白し、キスをして、終いにはセックスをするということなど、宇宙の始まりについて考えるような、途方もないことだった。彼女のいる奴らは、概して顔がよかったが、中にはそうでもないのもいて、ましてや彼女が可愛かったりするのを見ると、心の底から羨ましかった。

卒業した高校は、有名私大への系列校だったので、半分は推薦で、その大学へ進学できることになっていた。

私は中学受験で燃え尽きてしまった口で、成績は約三百人中最下位とほぼ最下位を行き来していたため、関係なかったが、最後の期末テストの時期はみんなそわそわしていた。

推薦の希望票を提出するため、全員で列になって、肌寒い廊下に並んでいると、同級生の花田が、

「教育学部で希望出す奴はいないよな？」

と言いながら、みんなの希望票を覗いて回っていた。

自分の希望する学部のライバルを少しでも減らし、推薦を有利にしようと考えていたようだが、私のところには来たものの、

「重村のは見なくていいや」

と言ってそそくさといなくなった。

成績的に推薦が通る最低足切りに届いていないのは明白なものの、一応教育学部の国文科を希望していたので恐ろしかったが、見られもしないのはさすがにみじめではあった。

前の方に並んでいた、バスケット部で顔もよく高身長で彼女もいる高東が、推薦の当落線上の成績だったのだろうか、

「もう今の彼女と普通の家庭を築ければ、それ以上何も望まないから、それだけはお願います！」

と叫んでいた。

それを聞いていた私は、彼女と家庭を築くなんてそんな雲の上のような望みを、最低限のこれだけは少なくとも叶えたい事柄のように叫ぶ高東を憎らしく思った。

高東は結局、推薦に落ちて、自力で受験をしてW大へと進学した。

推薦に落ちたと聞いたときは心から喜んでる自分がいた。

しかしその後、受験勉強を頑張って、回り道はしたものの、最終的に自分の望みを叶えた

ところを見て、やはり彼女がいる奴は違うなと思った。

そして結局はその子と幸せに過ごしていくのだろうということを考えると、醜悪な嫉妬心に苛まれた。

私は幸せな家庭というものに、憧憬を抱いていた。

一浪の末にS大へと進学した私は、同年代の女性がいるという環境に、慣れないながらも必修科目や基礎ゼミの講義を通して友人を作り、サークルにも入ることで徐々にではあるが、適応していった。

入学一年目の春、フランス語の授業が一緒になった同学年の聖沢奈美さんに、自作の恋愛小説を送り付けるといふ暴挙に出たことを除いては、大学生活は楽しく過ぎていった。

ちなみにその時に送った恋愛小説は、授業で作った短編小説だったが、彼女をモデルにしたヒロインが登場するでもなく、なぜ送ったのか今考えると分からない。

ただその小説の出来に、大変な自信があつて、その小説を読んだら、自分のことを素敵な人だと思ひ、好きになつてくれるのではないかという、思い違いも甚だしい愚行だったと言ふ他ない。

小説の内容は、主人公が地元の酒屋のベンチに座り、知らない女の子が後から来て、一緒に煙草を吸っているうちに仲良くなるという設定だった。

当時好きだった西尾維新の『化物語』の影響を多分に受けた作風で、笑いを意識した会話劇を演出しようとした結果、寒々しいただの惨劇となっていた。

その小説のクライマックスを引用する。

話し疲れた二人の間に、心地のいい静寂が、訪れた。

そして偶然にも、僕らは、同時に煙草を吸って、煙を、吐き出した。

二人の口から直線的に出た紫煙は、前方に広がって、溶け合い、空気の中に、消えていった。

僕は、あることを思いついて、半にやけで、彼女に言った。

「今よく考えたら、間接キスに、なっちゃいましたね」と、言った。

すると、沈黙が訪れて、彼女の、笑い声が爆ぜた。きよとんとした顔の筋肉が顫動し、甲高い声で緊急警報のような笑い声を上げた。僕の顔が限界まで紅潮する。

「すみません、クサかった、ですね、すみません…」と、僕が告げた時、彼女は、笑うのをやめて、微笑み、こう僕に、告げた。

「臭くなんてないですよ。煙草の香りは良いものです。」

彼女のいたずらっぽい笑顔を見たら、僕はここで、人生が終了しても良いんじゃないかと、そう、思った。

本当に人生が終了してしまえば良かったのではないかという結びによって、私の初めての小説は完結している。

煙草の紫煙と縁結びをかけて、『紫色の縁』というタイトルだった。

私はその小説のせいで、欠かさず出席していたその授業の単位を落とした。

聖沢さんに、送り付けたこの小説の感想を聞いたが、メールの返事はなかった。気持ち悪い以外の感想はなかったに違いない。

私は聖沢さんに完全に恋をしていたが、女性にアプローチを仕掛けるということが初めてで、自分が犯罪者に少し近づいていることに気づいていなかった。

それから数日後、朝大学に向かう長い坂を登っている途中、聖沢さんを見かけ、後ろから近づき、彼女の左肩にぶら下がっていたバッグを2回トントンと叩き、

「聖沢さんおはよう」と声をかけた。

すると彼女は、一度こちらを振り向いて、この上なくぎこちない笑顔を浮かべ、前を向いた。この前のことを謝らなければと思った私は、もう一度彼女のバッグを2回トントンと叩いた。

すると彼女は、競歩のような美しく無駄のないフォームで、大学への坂道を一心不乱に登り始めた。私との距離が猛然と開いていき、私は彼女にとんでもないことをしてしまったのだと気づいた。

5月25日の、薄曇りの中、朝陽がほんのりと射し込む坂道で、彼女の腰まで届いた美しい黒髪が揺れ、ほっそりとした身体から、あなたのことが嫌いです、というオーラが迸る様子は、凄絶だった。彼女はいつも出席している2限の講義を欠席した。

話は数日前に遡る。私は入学してまもなく、文学研究会に所属したが、あまり好きではないミステリーの話題が多く、また陰鬱な人ばかりだったので、雰囲気になじめていなかった。当時、重松清、山田詠美、筒井康隆が特に好きだった私と、趣味が合う人はいなかった。

ミステリー以外にも、ライトノベルが好きなのも多くいたが、広範な守備範囲を誇っていて、話が合わなかった。私はライトノベルで好きだったのは、西尾維新の化物語シリーズと谷川流の涼宮ハルヒシリーズだけで、他は文章や内容になじめなかった。

そんな中で、このままそのサークルを続けていくべきか迷っていた。

5月20日、友人の麦田と下柳から、スカバンドのサークルに入らないかと誘われた。それはお昼に、500円でワゴン販売されている弁当を、眺めの良いベンチに座って食べているときの出来事だった。

大学は山の上にあるので、その場所からは、東生田緑地や中野島、調布の景色が一望できた。特に素晴らしい景色というわけではないが、とても穏やかな風景で気に入っていた。大体2限が終わると、基礎ゼミや第二外国語の授業で仲良くなった麦田、下柳、池本の3人で、そのベンチに座って昼食を食べるようになっていて、麦田と下柳は、そのスカバンドのサークルに入っていた。

スカというのは、裏打ち、という2拍目4拍目にアクセントを置いた、オフビートの曲を

基本とした音楽ジャンルで、東京スカバラダイスオーケストラの曲を中心に演奏しているとのことだった。

正直、音楽知識皆無の私はぴんと来ず、面食らった。まだ出来てから2年目のサークルで、麦田と下柳がその第2期生ということになるのだが、サククスをやる人がいないので困っているとのことだった。

麦田は宮崎出身で、その影響なのかは分からないが、宮崎弁というより落語家のような、普段から少しべらんめえ口調で話すのが特徴的だった。

「正直スカだけじゃなくて、管楽器が入ってる曲なら何でもやるサークルだから、サザンとか好きならいいじゃねえか」と言った。

「サザンはたしかに好きだけど、管楽器どころか音楽をやった経験もないし、楽譜の読み方もほとんど分かんないよ」と私は答えた。しかし私は、俵万智の『サラダ記念日』にあった、「忘れたいことばつかりの春だからひねもすサザンオールスターズ」という歌を読み、すぐさま俵万智のことが好きになるくらいには、サザンオールスターズが好きだった。だからそれは、正直魅力的な提案だった。

吹奏楽部出身の下柳から、

「サククスだとリコーダーと同じ指の動かし方だから、そこまで難しくはないとも聞くと」と言われたが、リコーダーの運指は小学校卒業とともに忘れてしまっていたので、効果的な誘い文句にはならなかった。

下柳はいつも、少し不機嫌そうな様子で、黒を基調とした服を着ていた。髪が若干長めで、外に撥ねており、それが帽子を被っているように見えて、私は黒いスナフキンみたいだと思っていた。

「それにトランペットとかは金管楽器だから、音を鳴らすだけで大変だけど、サククスは木管だから比較的簡単に音が出るよ」と言われ、その後金管楽器と木管楽器の違いについて説明を受けた。

私が、どちらも金属でできているのに、なぜ呼び名が違うのかと訊ねると、それは息を入れるマウスピースと呼ばれる部分の特性が違うとの回答だった。

金管楽器はマウスピース全体が金属なのに対して、木管楽器はリードと呼ばれる薄い木の板を装着し、息を入れて震わせることで、音を出すとのことだった。

金属を震わせるか薄い木の板を震わせるかという話をされると、俄然後者のほうが演奏しやすいような気持ちになり、迷いはあったが、サククスなら吹けるかもしれないと思い、私はそのサークルに入ることに決めた。

池本は、その3人の中で一番話しやすい存在だったのだが、私がサークルに入り浸るようになって、お昼を共にすることも減り、少しずつ疎遠になっていった。

その前から、高校時代の話になり、私の出身高校が有名私立だと話すと、「お前には失望した」と言われたことがあったので、それも大きな要因かもしれない。

「失望する理由がわかんないんだけど」と私が言うと、

「そんな恵まれた環境で、一浪までして、W大に入れたチャンスを利用して、この学校に入ったことを、お前は心から後悔したほうがいいよ」と言われた。私は確かに池本の言う通りで、それはもう了解したはずの事柄で、心の整理がついていることだと思っていたが、かなり動揺して傷付いている自分がいた。

こいつに中学受験の勉強、そして入学後も親から期待を一身に受ける重圧の辛さが分かるはずがないと思っただが、言い返しても惨めなだけなのでやめた。

高校時代、いじめられないように必死でいじられキャラを演じてきた私は、学年中で面白いと評判だった日本史の小平先生に、卑猥な一発ギャグを仕掛けなければならぬ状態に陥り、クラスみんなから囃し立てられ、断ることができなくなってしまったことがあった。それはもはやいじめなのだが、頑なにそれと認めず、自分はまだいじられているだけだからセーフなのだと、言い聞かせている部分もあったかもしれない。日本史の授業終了時に、「重村ザーメン！」と叫び、両掌を下腹部付近で開く、という一発ギャグを小平先生に仕掛けると、先生は、田舎訛りのある口調で、

「そんなことをしていると、ホントに人間が駄目になりますよ」と言った。

それから入れ替わるように、クラス担任の英語を担当している兼田が入ってきて、

「重村、小平先生から話は聞いた。誰かやるように命じたやつがいるなら、今ここで言え。そいつらをきちんと処罰するから」と言った。

そんなことクラス全員が聞いている前で言われても、答えられるはずもなく黙っている

と、その兼田は、ほとんど快感を覚えているのではないかという声量で、

「お前そんなことしてる場合か！」
と、叫んだ。

実際私の成績は、クラスどころか学年を見渡しても相当悪かったので、明らかにそれを揶揄した発言だと思えなかった。

前々からこの教師は無神経なところがあると思っていたが、ここまで無神経だったのかと慨嘆した。

次の授業が始まるので、兼田が教室から出て行った。私に一発ギャグを命じた奴らも、口々に謝ってきたが、その言葉がより私自身を惨めにさせた。

その日の夜、入浴時、浴槽のお湯を冷ますため、腕を入れてかき混ぜていると、お前そんなことしてる場合かというあの言葉が、残響のようにぐるぐると浮かんできて、涙が出た。池本に言われた失望したという言葉は、そこまでではないが、その出来事を想起させるくらいには辛いものだった。

入部したスカバンドサークルの名前は、デファイという名で、フランス語で挑戦という意味だった。

管楽器を扱う音楽サークルということもあり、中高時代は吹奏楽部だったという人が多かった。

我々の1つ上の先輩たちが作ったサークルで、もともとみんな学内の大きなジャズサークルにいたのだが、その悪質な新興宗教のような体制が嫌になり、このサークルを作ったとのことだった。

高校の水泳部時代も先輩はいたが、凄まじい体育会系の部活だったので、あまり仲良くなるという雰囲気はなかった。

しかし大学のサークルは上下関係というものがほとんどなく、出来たばかりで人数も少なかったので、先輩たちともすぐに仲良くなった。

部室は、第3学生自治会館という、比較的歴史の浅いサークルに割り当てられる棟にあった。

建物は耐震基準とはおよそ無縁そうな代物で、入口の近くに墓地があった。

その小さな墓地には、墓石が5、6個点在していて、昼間でも木々に囲まれて少し暗くなっているので、誰の墓なのか確認する勇気が出ないまま卒業してしまった。

その後インターネットで検索してみても、友人に確認してみても、情報は全く得られなかった。

そのサークルに入って、同期の中山さんという女の子と親しくなった。彼女は、みんなからしーちゃんと呼ばれていた。下の名前は美咲で、しーちゃんというあだ名は本名と全く関連性はなかった。

その由来は、彼女がサークルの新歓期間中、部室を訪れた際、誰も在室していなかったため、また後日来ますという旨のメモを扉に貼って、帰った事が由来していた。

それを見つけた先輩たちが、今どきなんてすっかりした子なんだ！と話題にし、すっかりから転じてしーちゃんと呼ばれるようになり、中山美咲さんはその後、部室で下の名前を呼ばれることは一度もなかった。

しーちゃんは日本文学科に所属しており、第二外国語で同じフランス語を取っていたので面識はあったが、サークルに入る前はほとんど話したことはなかった。

ショートカットで、春夏秋冬ふわっとしたシルエットのロングスカートを履いている、当時流行していた森ガール風の女性で、よく友達と笑っている印象だった。

サークルに入って話すようになると、お笑いが好きということが共通していて、話すようになった。私はダウンタウンやシティーボーイズなどのコントが好きで、しーちゃんは若手芸人の追っかけをしているらしく、趣味は同じでも好きな対象が全く異なっていたので、その話題はすぐに尽きた。

しかし高校時代からしーちゃんは、男友達が多く、それも女性経験がない、いわゆる童貞とばかり仲良くしていたということだった。そういった事情もあるのか、とても話しやすく、お笑い好きとあって、会話の中に小ボケを挟んでくるので、それにツツコミを入れるとすごく喜んでくれた。

しーちゃんと話して笑い合っていると、私も心から嬉しいと思えた。その気持ちは日に日に強まっていった。

そしてやはりと言っては何だが、この人と一緒にいたいという気持ちが高ぶるにしたがって、私は聖沢さんで懲りたはずなのに、しーちゃんに対しても、半ば付け回すようなことをしてしまった。

ほぼ毎日のように一緒にサークルに行き、練習をして、帰る方向も途中まで一緒だったので、電車で一緒に帰った。

しーちゃんは吹奏楽部出身で、トロンボーンを吹いており、演奏後に楽器を手入れする大切さや、ジュースやお茶を飲んだあとに演奏すると、楽器が痛むからやめたほうが良いことなど、サククス初心者からの私に丁寧に教えてくれた。

そして私生活でも、女性からLINEやメールが来た際は、こまめに返信するのが礼儀だと教えられ、私はそれを実践した。

ある日のサークルの帰り道、大学の坂道には西日がいつぱいに射し込み、綺麗な橙色に染まっていた。

その坂道で、しーちゃんは私に、

「私は重村と常に一緒にいたいわけではないし、付き合ってる訳でもないのに毎日一緒に帰るのは、気が重いしだるい」

と言った。

またやってしまったなど私は思った。そしてもう一言こう付け加えられた。

「あと重村は不用意な発言が多いよ。冗談のつもりかもしれないけど、女の子に対して失礼な発言が多すぎる」

と言った。

この発言を食らう少し前に、私は、大学入学時に始めたレンタルビデオ店でのバイトで、同期の女性に不用意な発言をしたことがあった。

猫田さんというその女性と私は仲が良く、バイト中にいつも喋っていて、お互いにキツイ冗談を言うような関係だった。

確か好きな俳優さんと付き合えるなら何でもすると言った彼女に対して、いやあばずれ過ぎるでしょと発言し、その後完全に無視されるようになった。

実際には、その会話の前後で、私が、

「もう付き合っちゃいますか」と冗談で言ったことが原因だった。

その言葉が、猫田さんの高校時代に抱え込んだ何らかのトラウマを、刺激してしまったというのが真相だった。

私はこの時も、自分の口から出た言葉が相手にどのような受容されるのか、もっと自覚しなければならぬと思った。

しかしその話は、しーちゃんにしたことがなかったので、私は日常生活で、女性に対し、無意識的に失礼な言葉を、頻発しているのだということ突き付けられた。

しーちゃんからの糾弾に対して、発すべき言葉は、今まで国会議員の会見などでしか聞いたことがない、慚愧に耐えないという言葉なのではないかと、私は思った。

これまでの人生で、調子に乗って失敗したことは山程あるが、自信を持つことで成功したことは何一つないので、今後は慎ましく生きるべきだと心に誓った。

そしてしーちゃんに、前から話している通り、男子校出身で女性との接し方に慣れていないため、束縛のようなことをして、本当に申し訳なかったと謝罪した。

失礼な発言についても、また今後言わないように気をつけるが、もしそのような発言や行動があつたら、その場で何でも言っただけで済ませたいと伝えた。

私もそれから、さすがに気を使って付け回すようなことをやめて、自らの言動も注意深く顧みるようにした。

極力内省的に生きていこうと努めた。

普通そういうケースがあつた場合、許されることはなく、段々と疎遠になっていくことが多いが、奇跡的にしーちゃんは許してくれた。

しかしここで調子に乗って、また人としての道を踏み外しては元の木阿弥なので、内省的になる努力を続けた。

それはさすがに理不尽なのではないかという良くわからない注意も、きちんと受け止めるようにした。

帰りに電車に乗っていて、私が500mlのペットボトル茶を飲み、

「電車が揺れてこぼれたらって考えたら、普通そんなことできないよ。私は一度もしたことがない」

と怒られた時も我慢した。

そんなことは批判されるほど非常識なことではないし、普通にそんな人はいるのではないかと思つたが、我慢した。

他にも、ラーメン屋で私が油そばを食べ、しーちゃんがラーメンを食べていて、一口欲しいと言われたので差し出した。

しかし食べた後で、今日の朝歯を磨いたのかと問われ、昨日の夜は磨いたけど今日は磨いていないと言うと、

「毎日朝夜磨くくらいの、最低限の清潔さはあるって信じてたのに！」と怒られ、だら食べる前に聞けばいいのではないかと、私は思つたが、

「これからは磨くようにするから、ごめんね」

と言つて謝つた。これは少し自分が情けなく、恥ずかしかった。

しーちゃんが飲食店のホールのバイトを始めた時も、普段薄めに化粧をしているからなのか、ファンデーションが少し浮いていて、何も言わずに普段通り会話していると、何で綺麗とか言つてくれないのと責められたこともあつた。

私は、助言を貰っているのではなく、しーちゃんにとつて気に入らないことを、ねちねちと言われているだけなのではないかと思つた。しかし、あくまで女性に対して不慣れな、失礼な態度を取つた自分が悪いのだと、思うように努めた。

その後は他の先輩や同期との仲が深まって行くにつれて、しーちゃんについての思い煩

いの度合いも薄くなり、段々と普通の友人としての距離感に落ち着いた。

飲みに行き、サークルで演奏し、男女問わず友人や先輩と仲良く話すという、今までの生活では考えられない、初めての喜びを味わっていた。

そして9月のある日、しーちゃんから、大学生のうちしか海外に行けないから、行っておきたいと思っている、と言われた。

しーちゃんのお姉さんが、よく友達と二人で海外に行っていて、その話を聞くうちに、海外旅行への熱が昂まってきたということだった。

お姉さんには、宿の手配から何から世話してくれる男性がいて、彼氏ではないのだが重宝しているらしいと話していた。

お金はお互いが普通に出すらしいので、よからぬ関係ではないのだろうが、そういう男女の友情のようなものは、この世に本当に存在しているんだなど、私は驚いた。

その話に取り立てられて油断していたが、もつと驚いたのは、しーちゃんが海外旅行に一緒に行きたいと思っている相手は、私だと言ってきたことだった。

今から考えると、男友達との二人つきりでの海外旅行記を、姉から聞き、それが普通なんだと思つた結果、一般常識とずれてしまったということなのかもしれない。

しかし私は、この時、小躍りするという言葉の意味が、生まれて初めて、手に取るように分かった。出鱈目なステップを踏みそうになる足先をしっかりと留め、僕も海外には行ってみたいと思っていたんだと話を合わせた。そしてこれは、確実に付き合えるに違いないと思つた。

旅行の行き先を決めるため、新宿の旅行代理店に行き、営業の男性にカップルでのご旅行の場合はこちらがおすすめですよと言われた。

二人で、カップルではないんですよと笑いながら伝えると、向こうは驚いていた。

結局東南アジアに行きたいというしーちゃんの希望で、バリ島に行くことに決めた。

別々の部屋ではなく相部屋にした方が料金が安かったのでそうした。

サークルの同期からは、マジで付き合っていないとはいえ、海外に行ったら開放的になるし確実にやることになるから、コンドームだけは持って行けと念を押された。

その同期のことをしーちゃんは嫌いだったので、より嫌いになつてもらうための貢物を差し出すつもりでその話をする、とても怒っていた。

しかし正直私も、最後までではないにせよ、何らかの事はあるのではないかと思っていた。

念のため両親には、男友達と行くことと嘘をついた。

パッケージツアーだったので、あまり決めることや準備することもなく、パスポートやビザの申請を終え、無事に当日を迎えた。

出発日の8月の朝は、どんよりとした曇り空だった。

私は飛行機が苦手で、それも初めての国際線で極度に緊張していたので、しーちゃんに手を握っていてくれないかと少し泣きそうになりながら半分冗談でお願いすると、ベルト点灯サインが消えるまで、握っていてくれた。飛行機が上昇を続け、安定し、緊張が和らぐに

連れ、私は段々と照れて恥ずかしくなっていた。

緊張して汗をかいたのか、シーちゃんに、なんか海老の匂いがするよ、と言われた。

着いてから服を着替えた後も、翌日も、帰りまでずっと言われたので、自分の体臭が突然キツくなったのだろうかと心配した。一方で、そんなこと相手に面と向かって言うものでもないだろうと苛ついた。

飛行機が着陸し、その日はホテルに直接行って、夜は自由行動だったので、近くのビーチ沿いにあるレストランで食事を取った。

見送りの際、店員さんが店の外の砂浜まで出てきて、「アジノモト〜！」と叫び、彼女らにとって日本の代名詞は味の素なんだねと、二人で笑った。

帰りに話していると、

「私が言うことでそんなに一喜一憂しないでほしい」と言われた。

そしてホテルに帰ってきて、いざ寝るときに驚いたのは、シーちゃんはアイマスクと耳栓をして、両腕を交錯させて両掌を胸の上に置き、現代に蘇ったファラオのような姿で眠るということだった。

この寝姿では間違いなく何も事は起こらないし、酒でも飲みたい気分だったが、旅行中なにかあったらまずいということ、最終日の夜以外は飲まないという約束をしていた。

部屋は喫煙可能だったが、シーちゃんが嫌がるので、私はエレベーターホールまで出て、水の代わりにビーチの砂が入っている灰皿の前で煙草を吸った。こんなインドネシアのリゾート地に、シーちゃんと来て、自分一人でいることを、不思議に思った。

旅行中は、大変なことでもあった。

一番焦ったのは、ケチャというバリ島の伝統的な舞踏劇を見に行った帰り、タクシーに乗ったときのことだった。

バリ島のタクシーはポツタクリもあるので、必ずメーター付きのものに乗るようにガイドブック等に書いてあったため、旅行中それを守っていたのだが、ケチャを見た帰りはとても混んでおり、いわゆる日本の白タクのような、メーターなしのタクシーであれば、空いているような状態だった。

その中でも人が良さそうなタクシーを厳選し、シーちゃんと怖々乗り込み、途中森の中を通ったときはここで殺されるのではないかと震えていた。

森を抜け、段々と周りの景色が見知った町並みとなってきて、ホテルのロビーに着いたときには、二人とも安心からか、少し涙ぐんでいた。

旅行中、ツアー会社のバスに乗りそこねたり、ホテルへの帰り道で迷ったり、帰りの飛行場で飛行機に乗り遅れそうになったりと、シーちゃんと様々な小競り合いや喧嘩をしたので、旅行が終わって帰ってくるのがぐったりした。

家で久々に酒を飲んで酔っ払うことに決め、ビールを飲んで赤ワインを一本開けた。

そのまま酔っ払って寝たのだが、起きると自分が寝ていた布団にびっしょりと汗がしみていた。

布団に私の頭から爪先までを覆うほどの、大きな楕円形の汗じみができていて、苛烈なアンモニア臭がした。

しかし漏らしてしまった訳ではなく、間違いなくそれは汗だった。疲れと酒によるものなのか、原因は分からなかったが、身体中の老廃物が、全て流れ出てしまったかのようで、どうしてこんな事が起こるのか不思議だった。

匂いは海老の匂いなんて比較にならないものだったので、長く使っていた布団だったこともあり、その後すぐに捨てた。

旅行から帰ってきてしばらくすると、文化祭があった。

10月末に行われた文化祭のライブでは、ジャズを演奏した。

いつも部室棟がある非常階段で、ほぼ毎日ウッドベースを弾いていた敷島先輩に、9月頃に一緒に演奏しないかと誘われた。

敷島先輩は、雰囲気の良いサークルの中にあって、非常に厳しい人だった。

音楽に対してもサークル運営に関しても、とてもしっかりしていた。

なので、大学入学まで楽器演奏はおろか、ジャズも聞いたことすらなかった私が、その人の期待に答えるのは無理ではないかと思っただが、根気よく親切に教えてくれた。

文化祭では敷島先輩と、On the Sunny Side of the Streetをデュオで演奏した。結果は私のせいで、成功からは程遠いものではあった。

でもその経験は、まさに曲名の明るい表通りを歩いたような、素敵なものだった。

しーちゃんは文化祭が終わったら、サークルの先輩が好きになったから、告白すると言い出した。その先輩としーちゃんは、タイプが違ったので、ショックではあったが振られるだろうとたかを括っていると、予想に反してその先輩と付き合い始めた。

私はてっきりこのまま行けば、自分が付き合えるのではないかと思っていたので、泣き落としのような形で抗議した。

それはしーちゃんの帰りを見送るために、京浜東北線の改札に二人でいた時、僕っているのはしーちゃんの中でどういう存在なの？ただの友達なの？その程度の存在価値しかないの？旅行も二人でいったのというようなことを延々とめそめそと詰め寄った。

しーちゃんはめんどくさそうではあったが、なかなか改札を通って電車に乗ろうとはせず、話は聞いてくれていた。

その数日後、しーちゃんとしーちゃんの彼氏である先輩と、居酒屋で3人で飲んだ。

「この前改札前で一時間近く絡んだらしいけど、もう二月なのに流石に寒いし、もうそういうのはやめてくれないかな」と言われた。

それについて謝った上で、改めて僕はしーちゃんにとって何なのか？友達以上の存在ではなかったのか？今後僕は必要なのか？ということを通り越して尋ね続けた。

彼氏のいる前でこんな話をするのはどうかと思うが、今回の飲み会に誘ってきたのは向こうなのだから、開き直った。

するとしーちゃんが、お酒も入っていたのかもしれないが、

「重村のことを私はこれからも必要だと思っっているから、そんな悲しいことは言うなよ。わたしたちの友情を続けていこうってことじゃ駄目なのか？」

と言われた。私は正直そんな事言われても嬉しくも何ともないと鼻白むところはあったが、もうこうなつてはどうしようもないと、泣きながらしーちゃんと彼氏と酒を飲み続け、泥酔して彼氏の家に泊めてもらった。

明朝、小鳥のさえずりと、近くを通る小田急線の列車の音が聞こえ、横を向くと、仲睦まじそうな二人が正座して、じゃれ合いながら、仲居つきの旅館の朝を思わせる形で、おはようございますと挨拶をしてきた。

二人は疑似夫婦のような形で照れくさそうでありながらも、とても幸せそうで、何でこんなものを見せつけられなきゃいけないんだと思った。

私はおはようございます、と微笑んて言った。

しーちゃんが付き合うことにしたこの先輩というのは、敷島先輩だった。

私は文化祭での演奏後、二人が付き合い始めてから、嫉妬する義理もないのに嫉妬し、暗い裏通りに佇んでいる気分になった。

それはその後も続いて、年が明けて、春を迎えて4月になると、サークルにも新入生が入ってきた。

私は大学2年生になった。

その頃にはもうしーちゃんのこととはある程度整理がついていて、仲良くなった他のサークルの同期を好きになっていったが、告白しようか迷っているうちに、彼氏ができただようので、また私は独りだった。

5月、妹に、これらの経緯を相談した。すると妹は、

「おにいには、仲良くなった人みんな好きになっちゃうって感じだね」

と言われた。確かに私は、節操なく、大学入学後に、仲良くなった異性のことを、片っ端から好きになっていたのので、妹のその言葉で、自分がいかに稚拙か、思い知らされた気がした。

サークルに入ってきた後輩たちとは、始めはあまり仲良くなかった。

新入生たちは、大学のボランティア団体が主催する、新歓セミナーという良く分からない合宿を経て、入ってきた子たちが多かった。

サークルの一つ上の3年生の先輩で、恵美先輩という細身の、とても美人な先輩がその団体に所属しており、恵美先輩もその合宿に参加していた。

その縁で来た子たちが、サークルの一年生の大半を占め、セミナーメンツを略してセミナーと呼ばれていた。

彼らは、音楽サークルにも関わらず、練習はせずに部室でUNOをして喋って帰っていくだけだったので、あまり良く思われていなかった。

彼らは徒党を組んで、部室の雰囲気を一変させるため、結界師と呼んでいる人もいた。私もそんな先輩たちや同期の雰囲気を察し、セミナー達とも話を合わせながらも、付かず離れずの関係を保っていた。

それでも後輩にはもちろん可愛い子もいて、話していて面白い子たちも多かった。男女問わず後輩から先輩としてチャホヤされることは今までなかった私は、とても浮かれた。他の先輩から、多少の反感を買ったり、嫌味を言われたりするほどには、浮かれていた。そんな後輩たちも、段々とサークルに慣れてくると、楽器の練習もするようになり、先輩たちとも馴染んでいった。

私は先輩や同期たちとも良く飲みに行ったが、後輩たちと飲む機会の方が多くなっていた。

大学の最寄り駅は向ヶ丘遊園という駅で、大学がある山の上から、歩いて下って10分くらいのところにあった。

逆に駅から登って大学に行こうとすると、登りはキツイので15分くらいかかり、バスもあるのだが、歩いて通うものが多かった。

私もバス代をケチってそうしていた。

向ヶ丘遊園の駅周辺は栄えていたが、一人暮らしをしている後輩は、家賃も安いのもあって、比較的寂れた隣の生田駅やその隣の読売ランド前駅に住んでいた。

生田駅から大学に向かう場合、駅を出て少し歩いたところにある神社の、果てしなく長い階段を登ってから、大学の方へと歩いていくことになる。

そのため駅前ではなく、その神社の近くに住んでいた高木という後輩がいて、その家で飲む機会が多かった。

高木は経済学部にも所属していて、新歓セミナーで出会った恵美先輩がトランペットを吹いていたこともあり、その影響で、大学からトランペットを始めていた。

トランペットは金管楽器で、サククスよりも音を出すのが難しい楽器なのに、高木は初心者にもかかわらず、初めから音を出すことができた。

小学校の時に、鼓笛隊で少し吹いたことがあるからではないかと本人は言っていたが、それもほとんどやっていなかったそうなので、謎は深まった。

読売ランド前駅は、近くによみうりランドがあるからその名が付いた駅だが、よみうりランドまで行くには、駅の近くから出ているバスで、10分ほど登っていく必要がある。全くランド前ではなかった。

読売ランド前駅からすぐのところにある歩道橋を渡ると、イタリアンレストランがあった。

そこで後輩がバイトをしていて、夏希という下の名前から取った愛称で、なつきーと呼ばれていた。

なつきーはそのレストランのすぐ裏にある賃貸に住んでいた。

なつきーと部室でいつも一緒にいて仲良くしている後輩がいた。

彼女は江梨子という名前だったのだが、恵美先輩がエリーゼという謎のあだ名を付けた。エリーゼは、山形出身で眼鏡をかけた、少しぼっちゃりとしているほんわかした雰囲気の子で、そのニックネームが醸し出す西洋的な雰囲気とのギャップは、受け入れがたいものではあったが、なぜだかサークル内で定着していった。

ベートーヴェンの『エリーゼのために』が持つ、高貴で儂げないイメージとは対照的に、エリーゼはとても笑顔の可愛い、屈託のない女の子だった。

高木とエリーゼとなつきーと、他の後輩も交えて、私はよく飲むようになっていた。

特にエリーゼは、アルトサクスを演奏している吹奏楽部出身者で、私の練習も見えてくれていたし、慕ってくれてくれたので、仲が良かった。

なつきーは栃木出身のギャルで、なつきーと一緒にいたいから、という理由でサークルに入ってくる男がいた程に、モテていた。

私がサークルに入ったときは、恵美先輩のことが好きだった3年生の成島先輩も、新歓期間が終わってすぐ、なつきーに鞍替えした。

成島先輩は長身で、よくフオーマルベストを着ているおしゃれな出で立ちで、ノリも軽く、いつも恵美先輩を始めとした女性の先輩たちと仲良くしていた。

その中でも特に恵美先輩とは仲が良さそうだった。

成島先輩は、恵美先輩への好意を半ば公言していたが、恵美先輩は成島先輩を恋愛対象として、見ていないようだった。

4月になって一年生が入ってきた新歓期間の飲み会の後、雨が降りしきる中、傘をさして成島先輩となつきーが二人でどこかへ消えた。

そのことをみんな怪しいと思っていたが、その後、やはりというべきかすぐに二人は付き合い始めた。

恵美先輩はその事実を知ってとても憤慨した。

先輩は、成島先輩からの好意を伴った奉仕活動を、満更でもなさそうに享受していたので、自分よりも若い女に、それが奪い取られ、プライドが傷ついたのかもしれない。

もしくは自分がサークルに連れてきた後輩と、先輩としての立場があるにも関わらず、すぐにホイホイと付き合ってしまうその節操のなさに、腹を立てたのかもしれない。

真相は分からなかった。

そんななつきーと、エリーゼは明らかにタイプが違うにも関わらず、何故か仲が良く、いつも一緒にいた。

二人も新歓セミナーで知り合い、仲良くなったようだった。

エリーゼの母親は、山形の方から神奈川の方へ、娘を一人で送り出すことをとても心配し、入学前に友達を作ってもらう目的で、その合宿へ送り出したとのことだった。

その目論見は成功し、なつきーはエリーゼにとって、友人兼世話人となった。

エリーゼは市内ではなく、未だに水洗ではなく汲み取り式の便所を使う、結構な山の上の

町から出てきたので、パスモやSuicaなどの交通系ICの使い方はおろか、切符の買い方すら分からなかった。

なのでなつきーが、彼女に対して、色々と世話を焼いていた。

エリーゼのことは、私を慕ってくれている後輩で、色々と親密な話もしていたので、私が好きにならないわけはなかったが、成島先輩となつきーの例もあったので、後輩に対して向いている自分の好意を、他人にも自分に対して、隠蔽するようにしていた。

新入生が4月に入ってきてからすぐ、私をデフィに誘ってくれた、スナフキンに似ているドラマーの下柳も、エリーゼと仲良くなっていた。

下柳は、高校の吹奏楽部でも、先輩や同期よりも後輩との方が仲が良かったらしく、面倒見が良かった。

一年生がサークルに入る前まで、人付き合いが苦手で少し暗いイメージのあった下柳が、後輩に対して見せる違った一面に、みんな驚いていた。

その中でも特にエリーゼとは仲が良く、二人はボーカロイドや、ニコニコ動画出身のアーティストが好きらしく、アニメも良く観ていたもので、共通の話題が多いようだった。

下柳は小田原の方に住んでいて、エリーゼは親戚の家が町田にあるにも関わらず、二人で話すため、電車で帰る際、わざわざ小田原までついて行き、折り返して町田に帰ったりしていた。

そんなことが月頃から頻発していた。

ただエリーゼは、恋愛にあまり興味がなさそうな様子だったし、持ち前の人懐っこさで、先輩である下柳とも、仲良くしているだけなのだろうとしか、思っていなかった。

7月に入ると、夜からタイムラインが埋まり始め、朝には他のツイートが見えなくなってしまうほど、エリーゼと下柳がTwitter上で、公開リプライを送り合っていることが、多発するようになった。

その原因は、エリーゼが今住んでいる環境にあった。

エリーゼは入学当初から、母方の親戚の家に、居候をさせてもらっていた。母方の伯父が町田の方に住んでいて、その人が教育関係の仕事に就いていた。

それゆえに慈愛の心があることなのかはわからないが、大学生の居候というのは珍しいにも関わらず、その家から学校へ通わせてもらっていた。

しかしその家の母娘は、都会人特有の、少しヒステリー気味なところがあった。

また、家に親戚とはいえ、ほとんど会ったことのない他人と一緒に住んでいるというのは、ずっとお客様がいるようなもので、段々とエリーゼに対して、疎ましく、冷たい態度を取るようになっていった。

次第に、嫌味を言われたり、辛く当たられることもあった。

それもあって、今までまさに牧歌的と言って良い人生を送ってきたエリーゼは、ほぼ初めて人の悪意に日常的にさらされ、塞ぎ込むようになっていった。

そんな状況で一度、定期券をなくしてしまい、エリーゼは親類には言い出せず、泣きそう

になっていたところ、高木が再発行をしてくれて事なきを得たことがあり、とても感謝していた。

夜は自分のベッドにこもり、Twitterに入り浸り、孤独を紛らわすため、下柳だけではなく、他の友人にも、むやみにリプライを送っているような状況だった。

私はそれを見て、とても心配していた。

サークルの中で、あれはタイムラインが見えづらくなるから、やめて欲しいと話題になっていた。

そもそもメールやダイレクトメッセージでのやり取りをすれば良いのに、なぜそんなことをするのかとエリーゼに聞いてみると、その方が気楽だし、誰かがそれに返信してくれると、より楽しいからということだった。

私はその理由を聞いても、二人のやり取りに対して、誰かが返信して入っていくというのはあまりなかったので、不思議に思っていたところ、二人は付き合い始めた。

しーちゃんと敷島先輩に続いて、完全に油断していた私は驚いて、エリーゼに限ってそんなことはないと思いきや自分でいた自分が、馬鹿らしくなった。

高木はお調子者で、人が付き合い始めるということが大好きだったので、二人のことをサークル内で盛んに拡散した。

私はその当時、自分の好意を隠蔽していたので、あくまでも二人のことを祝福する、その彼の同期であり、その彼女の先輩という立ち位置での振る舞いを誇示した。

その年の8月にエリーゼは、母親にその現状を初めて明かし、家にお金の余裕もない中、「そんな思いをするくらいなら、一人暮らしをしたほうが良い」と言ってくれたそうので、9月に生田駅で一人暮らしを始めた。

引っ越しの日、同居していた親類から謝られ、母親からは、

「あなたに要らない苦勞をかけてしまっただけで申し訳ない」と言われ、娘からは、

「もっと仲良くできたはずだったのに、ごめんね」と言われたと話していた。

エリーゼは、生田駅から徒歩6、7分の、オートロックなど付いていない1Kの部屋を借り、一人暮らしを始めた。

始めはお金がないようで、いつも部屋でメロンパンを食べていた。

メロンパンは安くてカロリーが高いので、腹持ちが良いと言うのが彼女の理屈だった。

高木の家での宅飲みに誘っても、お金がないと言って断られるので、2リットルの梅酒を私が奢るからと言って、連れ出していた。

それはその後、エリーゼがバイトを始め、シフトを増やしていくに連れ、奢ることは減っていった。

しかし奢ることが減っても、一緒に飲む回数が減ることはなかった。

その年の文化祭で、敷島先輩は、今年も自分のバンドでジャズをやることに決めた。

今度はデュオではなく、ピアノとドラムを入れたカルテットでやろうということで、私も誘ってもらった。

その頃はもう、幸いにして私が、शीちゃんと適度な距離感を掴むことに成功し、普通に仲良くする友人の一人に落ち着いていた。

なので敷島先輩とも、サークル運営に関することや、私の音楽に対する練習姿勢で怒られることはあっても、プライベートでは仲が良かった。

そしてエリーゼもそのバンドに誘われ、トランペットの先輩と、クインテットで演奏することになった。

शीちゃんは自分が誘われないことを嘆いて、本当に少し泣いてもいたので、私は

「敷島先輩はシャイだから、彼女と演奏するっていうのは、照れ臭かったんじゃないかな」と言った。

するとशीちゃんは、

「あいつはそういう所あるからな。でもそこが良いんだけどな」

と言って機嫌を直した。突然の方向転換ではあったが、私は安堵した。

私は昨年引き続き『On the Sunny Side of the Street』を演奏することになった。

エリーゼが演奏するのは、『strasbourg st. denis』という曲で、かなり難しい曲だった。

ジャズの演奏は、イントロが終わると、テーマと呼ばれる基本となるメロディを全員で演奏し、その後各パートでアドリブと呼ばれるソロを取り、最後にテーマの演奏に戻って終わる構成が多い。

アドリブでは各パートがテーマの曲にアレンジを加えて演奏したり、すっかり原型を止めに、難解なフレーズを入れて演奏をすることもある。

ただテーマのメロディについては、ジャズの有名曲では概して、運指や音域の面で比較的簡単なものが多かった。

しかしエリーゼが演奏する曲は、テーマの部分も、トランペットとサクソスの掛け合いが美しい曲であるがゆえに、より難しく、アドリブの部分も、名演とされているものを敷島先輩が採譜し、それを演奏するので、さらに難しかった。

エリーゼは吹奏楽部出身ではあったが、アドリブというのは言葉の通り即興であり、拍に嵌りきらない部分が魅力なので、それを再現するというのは、今まで経験したことがないゆえにいびつで、苦戦していた。

文化祭が近づくに従って、エリーゼから笑顔が消えた。

それは曲が高難易度で本番が憂鬱になってきたということだけではなく、敷島先輩の無言の圧力からだった。

敷島先輩は、相変わらず部室棟の非常階段で、授業以外の時間はほとんど、ずっとウッドベースを弾いて練習していた。

真剣な表情で、夕闇が迫る美しい空を背景に、敷島先輩の無骨な指先から、聞く者の鳩尾を震わせる低音が放たれている様は、圧巻だった。

敷島先輩は楽器の練習に関して自律的で、もはや禁欲的とも言っていぐらい真剣だった。

しかしそれをいつも見ているエリーゼは、今までのように部室で誰かと喋っていても、飲みに行っても、私も練習をしなければいけないのではないかと気が病んだ。

気に病むことで部室からも足が遠のき、練習不足になるという悪循環に陥っていた。

実際私も、夏休みあまり練習ができていなかったのも、敷島先輩に

「お前夏休み中何やってたんだよ」と怒られたこともあった。

エリーゼはそれを聞いて、私も怒られるのではないかと怯えた。

一緒に『strasbourg st. denis』を演奏する、トランペット担当の南浦先輩は、敷島先輩の同期だった。

南浦先輩は生田ではなく、一部の学部生のみが通う神田キャンパスに通っていたので、部室に来ることもあまりなかったが、この練習には本腰を入れていて、来る回数が普段より増えていた。

二人ともドラムやピアノ、ウッドベースも含めたバンドでの合わせ練習が行われるたびに、落ち込んでいた。

文化祭が行われる直前の10月、私が夜電車を降りて、帰路を歩いていると、下柳から着信があった。

私がコンビニの前でその電話に出ると、エリーゼが精神的に落ち込んでいるので、去年敷島先輩とのジャズ演奏を経験している私から、励ましてあげてほしいとのことだった。

エリーゼは電話に出るなり、

「重村先輩、もうホントに辛いです」と涙声で話し始めた。

敷島先輩から特に何を言われた訳ではないが、何をしても練習をしなければならぬのではないのかと思ってしまう、楽しめないし、部室に行くのも怖くなっているとのことだった。

私は正直言って大したアドバイスはできなかったのだが、去年も今年も、エリーゼほどではないにせよ、重圧を感じながら練習していたため、気持ちは分かった。

私はこんな真剣な相談を受けているにも関わらず、この話に限っては、彼氏よりも自分を頼ってくれていることになぜだか優越感があり、少し興奮して声が大きくなっていった。

もう気温も下がっていて、肌寒いにも関わらず、30分くらいは話していた。

「重村先輩と話したことで、少し気持ちが軽くなりました」

とエリーゼが言い、

「話だったらいくらでも聞くことはできるから、いつでも話してくれて大丈夫だからね」と私が言って、電話は終わった。

私は後輩からの悲壮な相談を受けながら、自分の下柳に対する優越感が顔を出した事実、に、慄いていた。

考えないようにしていたが、私はエリーゼのことが、後輩としてだけでなく、恋愛対象

として好きなのかもしれないと思った。

それからというものが、彼女と話していて、笑顔を見て、人懐っこさを感じるたびに、自分の好意に蓋をすることが難しくなっていた。

11月の文化祭で、敷島先輩バンドの演奏が終わり、傍から聞いていてとても素敵な演奏だったが、南浦先輩とエリーゼは、人目をばからず号泣した。

それは達成感というよりも、開放感に近い涙に見えた。

その日の夜、大学の近くに住んでいる先輩の家にみんなで飲みに行き、私は終電を逃し、エリーゼの家に泊まった。

さすがに下柳と付き合っているエリーゼの家に、私一人で泊まる事に抵抗はあったが、その時は文化祭も終わって気も大きくなっていったのか、酔いも手伝って泊まってしまった。

他の先輩が心配していたが、私と先輩に限って何かあるわけありませんからとエリーゼは笑っていた。

私も釣られて笑ったが、少し胸が痛んだ。

大学から生田に向かうため、鬱蒼とした樹木に囲まれた道を通り、人気のない歩道橋を渡り、信号待ちをして、山を下った。

その間二人で、とりとめのないことを思いつくままに話し、話題が途切れると、心地よい沈黙を共有した。

そしてエリーゼの家に着き、そのまま何もせずに寝た。

海外旅行に女の子と二人で行っても、何も事が起きることがなかった私は、国内においてももちろん、それは同じことだった。

その後、文化祭のライブ映像を先輩の家で観る会があった。

その映像を撮ったのは、記録係の下柳だったのだが、エリーゼが出ているバンドの時だけ、エリーゼがアップになったり長く映ったりしていたので、恣意的なカメラだなあと話題になった。

年が明けて、1月に高木の家で鍋を食べ、エリーゼと三人で飲んでいる時、高木が先に寝てしまった。

私とエリーゼは電気を消し、炬燵に入り、横になって話をしていった。

そして親戚の家から通学していたときの話になり、エリーゼはその時の心情を、切々と語り始めた。

話を続ければ続けるほど、当時のことを思い出したのか、次第に涙混じりになっていった。親戚に対しての鬱屈した気持ちなど、親に相談することはできないので、一人で抱え込むしかなかったこと。

今まで人から毎日のように疎まれたり、誰かに気を使ったりするという経験は、家庭ではもちろん、学校生活でもなかったもので、どうして良いかわからずに、置いてもらっている親戚との距離が開いていくことに、歯止めが効かなかったこと。

唯一、そんな気持ちを紛らわせることができたのが、Twitter上での下柳との公開リプラ

イだったことを話していた。

始めは、どんなアドバイスをしようかと冷静に聞いていたのだが、感情移入の結果、自分も涙が出てきてしまい、とっさにエリーゼの手を握った。

私は手を握りながら、夏目漱石の三四郎に出てきた、Pity's akin to loveを、可哀想だたあ惚れたってことよという言葉に翻訳する場面を、思い出した。

エリーゼはその手を放すことなく、泣きながら当時のことを語り続けた。

私も感極まって、今この状況で、抱きしめることもできず、手を握るだけしかできないことが辛いとエリーゼに言って、本格的に泣き出し、高木を起こさないように、二人で静々と泣いていた。

考えてみると、私が異性の手を握ったのは、シーちゃんと飛行機に乗った時以来だった。

この夜の出来事を経て、私からエリーゼに対しての好意は、揺るぎないものになった。

しかしやはり私は、彼氏がいる女性を好きになってしまったことへの抵抗からか、なかなか自分でそれを認めなかった。

エリーゼにとっては、そんなことがあっても、ずっと私は良い先輩であり、よもや恋愛感情を向けられているとは、露ほども考えていそうになかった。

そして2月のバレンタインデーが近づいてきた頃、私にとって絶好の機会が巡ってきた。エリーゼと下柳は、その日会う約束をしていたのだが、下柳が、その日は自分が好きなゲームの発売日なので、避けたいと言いつ出したとのことだった。

どうしてもその日はそのゲームをやり込みたいという下柳に対し、1年に一回のイベントなのだし、ゲームが理由というのは受け入れがたい、ということでエリーゼも譲らず、喧嘩になった。

私はエリーゼから、その相談を受けるという、まさに千載一遇のチャンス到来に歓喜した。これで先輩という立場を利用して、二人を別れさせることができれば、自分もエリーゼのことが好きなのか、もやもやと考えることはなくなると思った。

私は慎重にその相談に対応した。

エリーゼが言うには、そのバレンタインデーの一件だけではなく、LINEや電話の頻度も以前と比べて少なくなり、向こうが冷めてきているように感じるとのことだった。

私は以前、下柳と話している時、段々と二人の関係性が落ち着いてきていて、それはそれで穏やかでも楽しいから、良かったと話していたことを思い出したが、黙っていた。

あくまで冷静に、バレンタインデーは、2月14日という日にちが決まっているが、ゲームをやり込む日は、その人次第で簡単にずらすことができるので、下柳がその日をずらせないというのはおかしいと言った。

それに加えて、Twitter上であれだけの頻度で会話していたにも関わらず、LINEや電話のやり取りが減っているというのは、冷めているのではないかと思うし、バレンタインデーの一件は、その証左に違いないという論旨を展開した。

エリーゼも、やつぱりそういうことなんでしょうかねと落ち込みながらも同意し、二人で話し

合ってみると言った。

おそらく別れることになると思う、とも言った。

私は自らが放つ醜悪な感情を押し留め、

「別れる別れないはあれだけど、二人が一番幸せな道を辿れることを願ってるよ」と言った。

その話し合いの結末が、どのような結果を迎えるか、期待に胸を膨らませて吉報を待った。2月の末に、エリーゼからLINEで連絡が来て、話し合いの結果、別れないことに決めたという一報が届いた。

私はこの一ヶ月弱、二人の別れを期待したので拍子抜けし、怒りが湧いた。

しかしそんな態度を見せたら終わりなので、

「それは本当に良かったね！」

二人にとつて、良い結末で何よりでした。

これからも何かあったら、相談してね！」と返信した。

それから約2ヶ月後の、年度も変わった4月15日の夜、エリーゼは読売ランド前に住んでいるなつきーの家で、泥酔して寝ていた。

私と三人で飲み始めたのだが、2リットルの梅酒を、ほぼ一人で空けてしまった。

原因は、下柳とのことだった。

エリーゼと下柳との関係は、二月に修復されたかに見えたが、やはりLINEや電話での素っ気なさは続いたようで、関係が落ち着いてきているだけだという下柳の考えに、エリーゼは納得できなかった。

会う約束をしようとしても、その間隔は間延びしていき、もう相手の気持ちが冷めているとしか、考えることができないので、別れたいとのことだった。

エリーゼを励ます会として始まったその飲み会も、酔いが回るにつれてエリーゼが泣き出し、外に行って下柳に電話をかけた。

帰ってきたエリーゼは、亮太さんと別れることにしたと言い、泣き崩れ、梅酒を水のようにするすると飲み始めた。

そして梅酒の紙パックが空になると、そのまま寝た。

私は、その姿をみて、心から可哀想だと思った。

自分が二人を別れさせようと考えていたことも忘れて、義憤に駆られた。

故郷を離れて、辛い環境に身を置き、その時から、唯一の心の拠り所となっていた男と付き合い、今それが失われてしまった悲しみが、痛いほど胸に迫った。

もし自分が彼氏という立場にいるなら、会いたいという容易い願いを、いくらでも叶えてあげることができるのに、下柳は何で、こんなにも酷いことをするのだろうと思った。

22時頃にエリーゼは起きてきたので、酔い醒ましに二人で、コンビニに行ってくるとなつきーに話し、一階まで降りた。

私は、少し話したいことがあると言って、入口の階段に腰掛けた。

「下柳とのことは、何て言っても良いか分からないけど、大丈夫？」

「少し落ち着きました。ホントにいつとも迷惑かけちゃってすみません…たくさん泣いたから分からないけど、寝て、すっきりした気がします」

「それは本当に良かった」

と私が言って、二人は黙った。

なつきーのバイト先のイタリアンレストランの明かりと、僅かな街灯だけが、我々がいる路地を照らしていた。

私は、これを言ってしまったら、関係性が壊れてしまうのではないかと、自分にまわりついてくる、恐れと不安感に何とか打ち勝ち、ようやく言葉を告げた。

「エリーゼは、もし僕が付き合ってほしいって言ったら、どうする？」

と私は言った。

我ながら、なんて弱腰の、そして狡猾な言い方だろうとは思うが、私の人生で初めての、相手に対して、直接顔を突き合わせて行こう、告白だった。

それを聞いたエリーゼは、どうするって、と言って固まった。

開いた口が塞がらないとは、まさにこのことだ、という顔をしていた。

彼女はどうかやら、本気で私のことを、優しく良い先輩としか、思っていなかったようである。思っていないにしても、こんなにも思っていなかったのかとこちらが驚くくらいの驚きようだった。

二人の間に何とも言えない沈黙が流れ、県道3号線から分岐した、名もない通りを走る、車の音だけが聞こえていた。

「ちょっと今日はいろんなことがありすぎて、考えられないので、日を置いて考えてもいいですか」

とエリーゼは言った。

僕は是非前向きに考えて欲しいと、間の抜けたことを言った。

なつきーに怪しまれないように、コンビニにも行かず、家の前の自動販売機で、飲み物を買って帰った。

その日はそのままお開きとなり、私は充電間際の小田急線に乗って、家路についた。

その間ずっと、自分が行ったあまりにも、軟弱者の告白に、心底失望していた。

さすがにちゃんと気持ちは伝えなければいけないと思ひ、家の最寄り駅に着いてから、エリーゼに電話をかけた。

もうすでに日も回っていたので、出ないだろうと思ったが、意外にもすんなり電話に出た。いつも丁寧で話しているエリーゼが、時折見せる砕けた言葉遣いに、私は射抜かれた。

「今日はもう、本当にびっくりしちゃったよ」と笑いながら言ってくれたことに安堵し、さつき大切なことを言い忘れてしまったから、電話したのだと告げた。

私はエリーゼに、

「好きです。付き合ってください」と言った。

エリーゼはそれに対し、

「ありがとう。考えてみます。前向きに考えたほうが良いんだよね？」と返してくれた。

感触は悪くないのではないかと思ひ、私は電話を切った。

結局その後、答えが出ないままに二人で会うようにはなつたが、付き合うのか付き合わないのか、一進一退の攻防があつた。

エリーゼとしては別れたばかりで、やはり下柳のことを思い出すが、多々あるようだった。

告白の後、御茶ノ水に二人で出かけて、私が浪人時代に通っていた予備校や、林立する楽器店をめぐり、お昼に友人とよく行つた豚骨ラーメンを食べ、明治大学のリバイタワーに登つて、東京の景色を見ていた時もそうだった。

エリーゼは、下柳と行つたことのある、東京スカイツリーを思い出してしまつたから、やはり付き合うことはできないと言われた。

あなたは何も悪くないんだけど、私の整理がつかないとのことだった。

それに対して私は、エリーゼの整理がつくまで、いつまでだって待つから、そんな事言わないで欲しいと言って、その後も膠着状態が続いた。

彼女の家で鍋をして、お酒を飲み、もう抱きしめてもいいだろうと思つて抱きしめると、やはり思い出して泣いてしまつた事もあつた。

これはもう付き合つてるようなものだど油断していると、下柳に返す荷物があるから、それを取りに来た時、もしかしたら雰囲気流されて、キスとかしちゃうかもしれないと言われたりして、不安を煽られることもあつた。

そんな紆余曲折もありながら、5月の初めに、私とエリーゼは正式に付き合うことになつた。

私が押し切つたと言つて良いかもしれない。

ただし下柳と別れて、まだ一ヶ月程度しか経っていなかったこともあり、サークルの人たちに、すぐに付き合い始めたということが知られると嫌だから、人には話さないで欲しいと言われた。

もちろんそれは了承したが、私は浮足立っていたので、人に言いたくて仕方なかった。

後から知られて、何やかやと周りから言われるよりも、先に話して味方を作っておいた方が良いという、よくわからない理屈を立てて、勝手に仲の良い人達に次から次へと話していた。

それも二人や三人ではなかつたので、もはや公然の秘密のようになり、彼女にも当然知られることとなつた。

私の裏切りが発覚した日、怒つたエリーゼと生田の家に行き、私は謝罪した。先にみんなに話しておくことで、味方を作っておきたかつたという、意味のわからない理由を述べた。

彼女は、たとえそうするにしても、私の許可を取ってからにするべきだと、尤もな事を言った。

みんな、私達が付き合っていることを分かっている、そんな素振りを見せないように振る舞っている私のことを、内心では笑っていたんだと思うと、悲しいし、恥ずかしいし、やるせないと言ひ、今日は帰ってくれと言われた。

私は、彼女の家を出る時、身につけている財布、携帯、定期入れ、イヤホンの忘れ物がないかを確認するため、いつもポケットを打楽器のように四つ叩いた。

普段はそれを見て笑ってくれるエリーゼは、当然だがくすりとも笑わなかった。

私は家を出て、生田駅に向かう下り坂とは反対方向に、あてもなく上へ上へと登っていった。

坂の上に戸建てが密集して立っている場所があり、坂に沿って短い階段が続いている場所に腰を降ろして、生田の風景を眺めた。

高台からの見晴らしは良く、空も綺麗に晴れていて、私にとっては残酷なくらいに澄んだ、穏やかな景色だった。

私は、今まで自らが犯してきた様々な失敗を、走馬灯のように思い出し、全ては自らの過信、油断、思いやりのなさが招いたものだと痛感した。

どんなに辛いことがあっても、死んでしまつて、何も感じなくなるよりは良いと、常々考えているので、本気で自殺をしようと思つたことはなかったが、このときばかりは自分が情けなく、この階段から飛び降りてしまおうかという思いが、頭をよぎつた。

高校時代の友人が、事あるごとに、因果応報と口癖のように言つていたことを思い出し、今回のことはまさに因果応報だと私は思つた。

結局去年しーちゃんに言われた、重村は不用意な発言が多いよという指摘から、何一つ成長していないんだなど、私は思つた。

私が高校以来、ずっと切望し、ようやく手に入った小さな燈火が、全て自分のせいで、風前の燈火となつている事実には、打ちのめされた。

このまましばらくここに座つていようと思つたが、座っている階段は住宅地にあり、公共物ではないので、住人に怒られるかもしれないと思ひ、坂を下り、駅に向かった。

私はサークルの同期で仲の良かった、エリーゼのゼミの先輩でもある、赤松に、事の顛末を報告しようと電話をかけた。

赤松は経営学部で、ゼミとバイトに明け暮れていつも忙しそうにしていたので、電話に出ないだろうと思つていたが、すぐに繋がつた。

話し合いどうなつた？と聞かれたので、とんでもなく怒つていたので、もう修復は難しいと思うと話すと、俺もなんとかエリーゼに話してみるよと言つてくれた。

逆効果になる気はしたが、とにかくそれに縋つてみようと思つた。

それから一週間、私は Mr.Children の『君が好き』を聞いて泣いていた。

「もしもまだ願いが一つ叶うとしたら」という歌い出しから、
「君が好き」というサビの始まりから続く、

「僕が生きるうえでこれ以上の意味はなくなっている」という歌詞に、とんでもなく共感した。

歌詞が陳腐で直接的すぎる曲だと、今まで敬遠していたのが嘘のように、桜井和寿のボーカルが、心を震わせた。

失恋の気配が、自分を酔わせているのも感じていて、それを高めるためにあえて、欧陽菲菲の『ラブ・イズ・オーヴァー』や、五輪真弓の『恋人よ』を聴いたりもした。

とにかく泣いて、お酒を飲まないし、やっていられなかった。

親にこんなことは相談できないし、友達に相談したくもなかった。

初めての彼女と付き合い合はしたけれど、自分が浮かれて周りに言いふらした結果、破局しそうになっているけどどうしようかなど、誰かに話したいわけはなかった。

一週間後に私が、

「こんなことをしてしまって、完全に自分のせいなのに、言えた義理じゃないけど、心からあなたのことが好きだし、これからもずっと一緒にいたいと思っていますし、本当に言葉を尽くしても足りないくらいに、申し訳ないと思っています。」

あなたの信頼を裏切ってしまったのは申し訳ないけど、これから挽回するチャンスをもらえたら嬉しいです。

あれから色々考えたけど、やっぱりあなたがいなくてこれからのというのは、考えられません」という長文のLINEをした。

すると翌日、

「彼氏と別れて、すぐにあなたと付き合い合って、またすぐに別れるって、考えてみるとなんか馬鹿みたいだから、もう許すことにする」

というLINEが来て、すぐさま彼女に電話をした。

尽くせるだけの謝罪の言葉を言い、本当にありがとうと何度も感謝を伝え、心から大切だと思っているとエリーゼに告げた。

本当に次はないからね、気をつけてよねと言って、エリーゼは笑って許してくれた。

赤松にも電話をして、別れないで済んだことを報告すると、俺は本当に何もしてないからと言いつつ、喜んでくれた。

赤松が、エリーゼにどう話してくれたのかは分からないし、それがどう作用したかも分からなかった。

後に彼女に聞いたところ、重村を許してあげてほしいとか言われたけど、その時は、周りに付き合っていることを勝手に言われて怒っていた訳だから、こいつも知ってて勝手なこと言ってるのかってという怒りが湧いた、と話していた。

それでもとにかく、別れることにならなかったということが、何よりだった。

私はその翌日、エリーゼに直接会って謝罪した。

彼女は電話で話したときよりも、怒っていたし責められもして恐ろしかったが、正式にこれからも付き合い合っていこうという話になり、安堵した。

その後、私達は少しずつ時間をかけて、恋人同士になっていった。私が童貞であるがゆえの、恥ずかしい失敗や勘違いも多々あったが、それを差し引いても世の中にこんな素晴らしいことがあったのかと思ひ、全てが夢のようであり現実であるという、初めての感覚を味わっていた。

エリーゼの私に対する接し方は、先輩後輩の関係だったときは、愛想良く、いつも穏やかに笑っていて、私を先輩として立ててくれるところがあつた。

付き合い合つてからは、私のことをからかうような冗談を、よく言ってくれるようになったので、親近感が増した。

私の態度が変わつたから、付き合いななきゃ良かったと思つてるんじゃないの、と言われたこともあるが、私は今のエリーゼの方が好きだつた。

どちらかというところ、いつも私を軽く扱うようなところがあるのに、酔うと枝垂れかかつてきて、じゃれついてくるところもたまらなく可愛かつた。

普段からその態度で接して欲しいと言うと、その娘は押し入れに住んでいるから、今は出てこないと言つた。

夏合宿の時、エリーゼは下柳に、いつか知られてしまうことだからと言つて、実は私と付き合い合つていることを告げた。

下柳は驚き、そして泣いていたとのことだつた。

私をサークルに誘わなければ、こんな思いをしなくて済んだのにといつところまで、考えを及ばせたかもしれないなかつた。

そしてその話を聞いた後、大学の部室棟にあるスタジオで、一人練習をしていると、下柳が偶然入つてきた。

私は焦つたのか気詰まりだつたのか分からないが、事もあるうに、下柳に対して、ごめんねと言つてしまった。

これはその後もずっと、自分自身後悔する発言だつた。

いくら別れていたにせよ、自分がその恋人と別れた当日に、以前から狙つていたであろう男が自分の恋人に告白し、そしてその二人が現在付き合い合つているという事実に加え、そんなことをした男に、謝られるという屈辱たるや、想像もできない程だつた。

私はその発言をすぐに悔いたが後の祭り、下柳は顔色を変え、スタジオを出ていった。

私はこの時、今まで漠然としか意識していなかつた罪悪感を、強く感じた。下柳に罪悪感を抱くというのも、失礼な態度だと分かつてはいたが、それを抑えることはできなかつた。

その年の冬、二人で鍋の具材を買いに出て、レジ袋を下げて少し前を歩いている、ジャージ姿の彼女を見て、なぜだか分からないが、私はこの人と結婚するんだろうと確信した。

何でもない夕方に、何でもない買い物をして、二人で歩いているこの時間を、私は生涯、

熱望していたのではないかと思った。

この人と、この先もずっと一緒にいたいと、私は思った。

その後は、下柳がTwitterで、煙草を吸っていて、競馬を時々やっていた私のことを、明らかに揶揄した「タバコもギャンブルもするブタ麵に彼女がいる現実もあるんだよなあ…」というツイートをする事件があった。

しかし私以外にも、煙草を吸い、賭け事もしていて彼女がいる人は、山程いるため、そのことについて争うつもりはなかった。

それ以外は特に、下柳と対立することもなく、エリーゼとの関係も、私が大学を卒業するまで順調だった。

我々は元々、重村先輩、エリーゼと呼び合っていて、付き合ってから、下の名前で呼び合おうと努めたのだが、結局しつくり来ることはなく、お互いをあなたと呼ぶ機会が多かった。

卒業してからもそれは変わらなかった。

関係が悪化したのは、私が社会人一年目の時で、社会に出る前に、遊ぶだけ遊んでおきたいエリーゼと、社会人になり、土日は毎週一緒にいたい私との間で、ぎくしゃくするようになった。

私の実家は市川市で、彼女は相変わらず生田に住んでいたので、大学生活という自由な時間がなくなると、会いづらくなってしまったというのも、原因の一つだった。

口論の末、これはもう別れたほうが良いのではないかとエリーゼが言い、私の仕事が終わった後、登戸の駅で待ち合わせをして、話し合いをすることになった。

登戸駅のベンチに二人で腰掛け、話し合いを始めたが、私はその冒頭、この話し合いで別れるって選択肢は、少なくとも僕にないからと言いつ放った。

エリーゼはこれに面食らったそうで、結局別れることはなく、関係は続いた。

私は、これは一人暮らしを始める良い機会だと思い、彼女の近くに住むため、登戸に引越した。

そうすることで平日の夜や、土日の少し空いた時間に会いやすくなり、関係は修復された。そしてその2年後に同棲を始め、さらにその2年後の2月、エリーゼにプロポーズをすることを決意した。

彼女の会社の先輩と飲む機会があり、その時、いつも派手なことをしない子だけど、プロポーズだけは、ロマンチックにしてあげてねと言われた。

それはその人の願望なのか、エリーゼがそういつた事をしてもらいたいという思いがあるのか、分からなかったが、後者の可能性もあることを考慮して、ロマンチックなプロポーズを自分なりに考えてみることにした。

私は、ロマンチックなプロポーズに様々思いを馳せたが、観覧車に乗って指輪を渡すという以外に思いつかなかった。

しかし、観覧車に乗りに行こうと言うと相手も身構えて驚きが薄れるかもしれないと思

い、当日までその予定は伏せておくことに決めた。

実行日の2019年2月8日、私は彼女を驚かせなければいけないという意識があり、プロポーズの匂いを消すため、お洒落なレストランではなく、新橋のとんかつ屋を予約した。仕事終わりの彼女とお台場で集合することも考えたが、お台場といえば観覧車ということで、感づかれる恐れがあったので、あえて彼女の職場からも近い新橋にした。

新橋の理由は、お台場の観覧車に乗るためには、ゆりかもめに乗らなければならなかったからなのだが、おおよそプロポーズをする日には不向きな場所だった。

普段新橋など行かないにも関わらず、美味しいと評判のとんかつ屋さんがあるからと言って、彼女を誘い出した。

新橋駅烏森口の、宝くじラッキーセンターの前で待ち合わせをして、店に向かった。

そこはどちらかというと狭い、店外のショーケースに、少し色褪せた様々なとんかつ定食やエビフライなどの食品サンプルが置いてある、古風なお店だった。

ショーケースの中には、おそらく店主直筆の、「とんかつ一代、こだわり続けて50年」というポップのようなものが置いてあった。

店の一番奥がカウンターキッチンになっており、カウンターに3席、4人テーブルが3つ置いてある縦長の店内で、私達は一番奥のテーブルについた。

入口近くのテーブルでは、おそらくは仕事帰りであろう30代後半くらいの女性が3人で、座っていた。

話が凄く盛り上がっていて、楽しそうにけたたましく喋っていたので、その人達に全く罪はないが、店の選択を誤ったなど、私は思った。

私達はとりあえずビールを頼み、上ロール定食を頼んだ。

特上を勧めると彼女は、脂が凄いだろうから上でいいと断った。

ビールが来て話しながら待っていると、カウンターキッチンの中で、店主のおじさんと女将さんが口論を始めた。

最初は小さな声だったのだが、段々と店主の声が大きくなってきて、彼女と二人で話の内容に耳を澄ませた。

するとどうやら、楽しそうに話している女性3人組が、とんかつやエビフライなどを全く頼まず、冷やシトマトやいたわさ等の少量のつまみを肴に、ひたすらにビールを飲んでいるため、店主が怒っているようだった。

そして察するに、3人組の女性たちも、この後来る予定のもう一人を待っているようで、それゆえに他の注文をしていないようだった。

店主は、うちは飲み屋じゃねえんだから、とんかつ頼まないなら帰れって言ってくれと女将さんに言い、女将さんも、気持ちわかるけど、そんな事は言えないと、一触即発の様相を呈してきた。

とんかつ一代、こだわり続けて50年の店主ゆえに、プライドを傷つけられているようだった。

私は、今日はプロポーズをするんだからそんなことで喧嘩をするのはやめてくれと思い、この店内の険悪な雰囲気を嘆いた。

エリーゼももちろんそのことに気付いていて、大丈夫かなあと言いながら、緊張していた。私達のとんかつ定食が届いた後も、その小競り合いは続き、食べ始めて少し経ってから、女将さんが、そろそろとんかつとか注文していただいても良いですかと3人組に尋ね、ようやく注文が入ったため店主の怒りも収まった。

その間私は、とんかつを食べた気がしなかった。

遅れていた4人目が到着して、より一層活況を呈するテーブルを尻目に、私達は食べ終わって店を出た。

店を出てすぐにエリーゼは、

「店主さん、めちゃめちゃ怒って面白かったね」

と言ってくれたが、私はこの店を、今日という日に選んでしまったことを後悔した。

新橋駅に着いて、私は、前から乗って見たかったゆりかもめに乗りますという宣言をした。モノレールはあまり乗ったことがないから、とにかく乗ってみたいというわけのわからない理由をつけた。

エリーゼはだいぶ怪しんでいたが、これは何かあるに違いないと感じたのか、訝しげではあるが、豊洲行きのゆりかもめに一緒に乗ってくれた。

私は地元で、大学時代のバイト先の先輩たち二人と飲む機会が多かったが、誰かの誕生日の時は、店員さんにケーキを持ってきてもらうサプライズを行うのが、恒例になっていた。

私は何度やっても、そのタイミングを図ることができず、「下手くそかよ」と言われてしまう程のサプライズ音痴だったので、今日もその難しさと段取りの悪さを感じていた。

しかしエリーゼは、ゆりかもめの車内でもよく笑ってくれていて、楽しそうだったので、私も救われたし、本当に嬉しかった。

夜8時を過ぎていて、こんな時間にお台場方面に向かう人は少ないのか、車内の人もまばらになっていった。

多少のビールが回ってきたのか、彼女はこくりこくりと眠り始めた。

私は誰も座っていなかった向かいの席に移って、彼女を眺めた。

車窓から見える街灯が、彼女の後ろを次々に通り過ぎて行った。

腕を組んで、小さな子どものように、すやすやと眠っている彼女を見て、この人がいるというだけで、この先の人生はもう、大丈夫だろうと私は思った。

プロポーズをする日に、改めて彼女のことを、何気ない場面で、心から愛しいと思えたことが、何より嬉しかった。

目的地の青海駅に着く頃には、もうどこへ行くのか、そしてそこで何が行われるのか、さすがにエリーゼも分かっているようだった。

私達は、商業施設を通して、パレットタウンの観覧車に乗った。

観覧車の中で、私達はとても緊張していた。

一番上まで上がるまで、何話して良いのか分かんないねと、エリーゼが言った。確かにそうだねと言って私も笑った。

私達が乗るゴンドラが上昇を続け、頂上の手前で私はティファニーの箱を取り出した。開けて良いのかな？と聞かれ、開けてみてと言った。

ティファニーの箱はリボンが可愛いので、私がそのまま取り出してしまい、エリーゼも極度の緊張からか、それを解くのが難航した。

ようやくリボンが取れ、中の指輪を見せてから、僕と結婚してくださいと言った。

エリーゼは、こちらこそ、よろしくお願ひしますとこやかに言ってくれた。

本当に大切にするねと私は言って、創作物ならこの後、スムーズに抱きしめ合っけてキスをするところだが、現実では指輪を落としたら危ないからとエリーゼが言って、丁寧にしまい、改めて二人で抱き合った。

ようやくこの人と、結婚することができんだなあと思っった。

観覧車を降りてすぐに撮られたカップルフォトは、今プロポーズを終えてきたことなど撮影者に分かるわけではないのに、知られているような気がして恥ずかしく、いかにも作り笑いで笑っている自分が嫌だったが、記念に買った。

そして冷静になってみると、自分がお台場の大観覧車に乗って、プロポーズを成功させるなど、この前まで微塵も考えたことがなかったので、人生とは、本当に分からないものだ、私は思っった。

旧暦で2月8日は、「事始め」とされている日で、

春が訪れ、農作業など、人の営みを始める日とされていて、だから今日をプロポーズの日を選んだのだとエリーゼに話すと、興味がなさそうだった。

とにかく私たちにとって、2月8日は大切な、始まりの日になった。

その年の9月に、私達は入籍をした。

ジューンブライドの由来も何も分からなかったが、何となく9月に籍を入れようという話になり、私は Wikipedia の6月にある記念日一覧を調べた。

すると6月13日は、衣笠祥雄の2130試合連続試合出場世界記録を樹立した日で、鉄人の日と呼ばれていることが分かった。

多少の怪我をしていますが、本調子ではなくとも、なんとか折り合いをつけて、試合に出れる状態を保っていくということは、並大抵のことではないと思っった。

そして結婚も、それは同じではないかと私は考へた。

常に良い時ばかりではなく、辛く苦しいことも、時には心が離れることもあるだろうが、それら乗り越えていくのが結婚であり、夫婦というものなのではないかと思ひ、その日を入籍日にすることを提案した。

エリーゼはよく分からないけど、その日で良いんじゃないかと良い、私達は当時住んでいた新宿区役所で婚姻届を提出した。

提出する時窓口の人が、愛想よくおめでとうございますと言うのではないかと勝手に

想像していたが、極めて事務的に受理された。

その後区役所の近くにしゃぶしゃぶ食べ放題のお店があったので、そこで夕食を取ることにした。

妻はお母さんに、LINEで無事入籍を終えたことを報告した。

名前が変わったから、少し寂しいとお母さんに話したそうだった。

するとお母さんから、本当に嬉しいことで、晴れがましい門出なんだけど、なにか悪いことをしたわけではないのに、江梨子が離れていってしまったという事が、寂しくて涙が出てきたという返信が来た。

それを見て妻も泣き出したので、およそ入籍直後とは思えない陰鬱な夕食となった。

悪いことをしたわけではないはずだったが、もしかして悪いことをしたのは私なのかもしれないと思った。

入籍してから結婚式場を探し始め、私はヤクルトスワローズのファンだったので、明治神宮野球場に程近い、明治記念館はどうかと提案した。

妻も特に希望はなく、ちょうどブライダルフェアを開催していたので、二人で出かけた。

明治記念館に入って少し進むと中庭があり、手入れの行き届いた芝生の美しい緑に、目を奪われた。

もうこの庭があるというだけで良いんじゃないかと私が言い、私も今そう思ったたと妻が言うので、他の会場を下見することなく、ここに決めた。

ブライダルフェアの担当者も、営業トークを披露する前からここにすると決めている我々に拍子抜けした。

他の会場も見えていないがここにすると話すと、お二人はそのような形で、色々なことをお決めになることが多いのですか？と心底不思議そうに言われた。

そうかもしれませんと二人で答えた。

式の日程は、覚えやすさも有り、2020年の2月22日にした。

和暦にしても令和2年2月22日になるので、2続きで縁起が良い気がした。

結婚式の打ち合わせはつつがなく進み、和装で神前式の形式で行うことを決めた。

明治神宮で結婚式をして、明治記念館に戻って披露宴をするプランもあり、その場合花嫁行列ができると言われたが、気恥ずかしくなかったのもありやめた。

あれは美男美女にしか許されないことだと、二人で意見が一致した。

それに場所としては壮麗であっても、明治天皇が神様として祀られていることに、二人ともあまり有り難みを感じず、こだわりはなかったので記念館の中で行うプランにした。

結婚式の2ヶ月前頃から打ち合わせが多くなってきて忙殺された。

二次会の会場を探している時に、元結婚式場の職員だった営業の人に話を聞くと、直前に打ち合わせをたくさん詰め込むのは、急がせて正常な判断をさせずに、高い演出を選ばせるためだと言われ、だからこんなに忙しかたと思つた。

確かに獅子舞の追加オプションが10万円と聞き、誰がそんな事をするのだろうと思つ

だが、正常な判断ができなくなっていれば無理はないと合点がいった。

喧嘩をしたのは一度くらいで、お互いの父親の衣装は、背広にすることに決めていたのに、うちの母親がやはり燕尾服にした方が良いのではないと言い出して、妻のお父さんはもう背広を買ってしまったので、妻と口論になった。

ちゃんと自分の親と調整してから色々と話してよと言われ、打ち合わせの帰りにわざわざ電車を降りて、ホームで言い合いをした。

結局妻と義父に謝りを入れ、燕尾服を着る事になった。

衣装合わせでは、私は体格が良いので着物がよく似合った。

太っている自分にとって、和装が一番似合う服なのではないかと私は思った。

多少幕内力士や駄目な落語家のような雰囲気も感じたが、とても気に入った。

妻は始めは白無垢で、披露宴から色打掛に着替えることにした。

お色直して洋装もできると言われたが、洋装だと体のラインが見えてしまうため、結婚式に向けて痩せるという無駄なことはしたくないと言うので断った。

自己紹介ムービーは、業者を入れずに自作することに決めた。

しかし私たちは、出かけたりしても二人揃って写真を撮ることを、気恥ずかしくしてこなかったのも、二人の写真というものがあまりなかった。

そのため急遽、新宿駅から明治記念館まで妻と二人で歩き、最後に四ツ谷でわかばのたい焼きを食べるといふ散歩を撮影することで、映像の足しにした。

その散歩が一番楽しい思い出だった。

結婚式の前日、妻は驚くべきことに残業で夜の21時近くに帰ってきた。

結婚式の前日なので、会社が都合をつけてくれそうなものだったが、それはなかったとのことだった。

しかし肝心な、明日の披露宴で読むことになる両親への手紙の原稿を、全く作っていないなかったので、妻は深夜までそれを書いていった。

私は明日早いに大丈夫のだろうかと心配した。

結局最後まで終わらずにその日は寝て、当日を迎えることになった。

結婚式当日の朝、妻の方が早く家を出て、私は後から式場に向かった。

その日は曇りだったが雨は降っておらず、中庭に出て写真が撮れることを嬉しく思った。式場に到着して着替えをする前に、待合いで座って春風亭一朝の淀五郎を聴いていた。

歌舞伎の忠臣蔵を題材にした演目なのだが、最後に切腹をする直前の主人公演じる判官が、駆け寄ってきた由良之助に「待ちかねえたあ」というオチが私は好きで、まさに結婚式にぴったりだと私は思った。

神前式は、私が署名する字が汚すぎて妻に笑われたりしながらも無事終わった。

式は静謐な空気の中で行われたが、式中に私の祖母が父に、三々九度のやり方やあの榊はどういう意味があるのかなど、気になることを矢継ぎ早に聞き、小声で黙るように諭されていて愉快だった。

大学当時妻が居候をしていた親戚の伯父さんだけは、結婚式のみ参加してくれた。会場が信濃町だったので、私のことを創価学会員ではないか心配していたそうだが、それは杞憂だとお義母さんが話してくれていた。

披露宴の入場は、やはり照れ臭く、ゆっくりと歩いてくる妻を待ちながら進まなければいけないと、介助の人に言われていたのに、先に進んでしまったりした。

披露宴も何事もなく、穏やかに楽しく進行した。

私の父は酔い過ぎていたし、祖父もこんな美味いビールは初めてだと言って飲みすぎて少し具合が悪そうではあったが、みんな楽しんでくれていた。

途中、出席者に質問をしていくテーブルスピーチが有り、司会者の人がこれは自分の得意分野だと言っていた演進だったので私達は期待した。

しかしこちらが事前に指定した人選が悪く、妻のサークルの同期からは、新郎は元彼女から新婦を奪ったようなものと暴露され、私の幼馴染からは、幼少期に一緒に風呂に入っていたら、新郎が包茎だと分かって驚いたと言われたり、散々だった。

しかし珍回答続出により、得意分野だったはずの司会者が明らかに狼狽しているのが面白く、これはトラウマになっちゃうねと妻と笑った。

そしていよいよ、妻が両親への手紙を読み上げる時間が始まった。

私は原稿ができていいのか心配していたが、妻は、

「お父さん、お母さんへ。私は今まで、主役になるようなことはなかったけれども、今日こうしてスポットライトを浴びて立っている姿を、どんな気持ちで見えていますか」と話し始めた。

これが大変な名スピーチで、会場中が泣いていた。

しかも後に、控えの原稿を渡していた司会者に聞くと、後半の方は原稿に書かれておらず、アドリブだったようで、私は驚嘆した。

その名スピーチの余波は、その後すぐに行われた私の父の挨拶に影響した。

最後の挨拶をするため、新郎新婦と両家の両親が横並びになった。

そして父の挨拶が始まるはずだったが、父は酔っていたのも手伝って号泣しており、こんな良いスピーチの後に挨拶できねえよと小声で母親に言い、良いから早く喋ってよと母と揉め始め、披露宴で喧嘩するなんて恥ずかしいからやめてくれと思っていると、挨拶が始まった。

しかし酔いもあり、先ほどの感動が残っていて涙をこらえているため、「ただいまご紹介に預かりました」という語り始めが、普段の声の2オクターブくらい下だったため、もはやお葬式のように妻と必死に笑うのをこらえた。

式が終わった後、会場にある大階段で集合写真を撮るのだが、私の父はどこかへ消えてしまっていて、時間もないので仕方なく、父抜きで撮った。

そして介助の人が本当に良い方だったので心付けを渡し、二次会の会場へ向かった。

二次会は大学のサークルの人だけを集めてやり、盛大に盛り上がった。

新型コロナウイルスが流行し始める、ちょうど直前の時期だったので、一人だけコロナへの恐れを理由に欠席する人がいて、当時はそんなこと気にして休むなんてあるんだと思っただけだった。

なのでそれが、後から考えると、マスクなしで50人規模で集まる最後の機会になった。二次会のあと、家には帰らず、義両親が泊まっている水道橋のホテルまでタクシーで向かった。

妻はタクシーの中で、本当に楽しかったから、結婚式もう一回やりたいなと言った。私も、こんなに楽しいものとは思わなかったねと言った。

途中車内から見えた国立競技場を眺めながら、書類上だけではなく、今日、対外的にも、正式に夫婦になったことを実感した。

神前式で読み上げた誓詞の通り、「今より後、互いに敬愛の心を尽くして、一家を斉え、苦楽をともに」する相手は、私の横ですやすやと寝ていた。

完